第十七回史跡めぐり資料

（一の割春竜上人生誕の地）

越谷市郷土研究会

呑竜上人の事跡

呑竜上人の事跡は、浄土宗大辞典・徳川実記、太田大光院所蔵文書等を詳細に調査探究を要しますが、その根本たる入場の地、群馬県太田市の大光院ではその資料の公開を得ないので、過去に出版されて居る諸書を考察し、その事跡の一端を記して見た。

浄土宗大辞典、国師日記、駿府政治録等は昭和廿五年度版　越谷市の史跡と伝説にも転載されて居ますので、これを集録し、新編武蔵風土記稿、呑竜上人略伝所収転載し史話としたい。

呑竜上人は現春日部市一の割田六二の大河山華厳院円福寺（当時は井上氏の屋敷内）にて、天文十一年八月廿五日（一五四二）父を井上将監信貞、母を近野と呼べる間に二男として生れた。父は源姓であり信濃源氏井上播部助頼季（頼信の弟）の末流であり、当時岩槻太田氏（太田美濃守資正）の家臣であり、一の割村五十嵐文の地頭であった。

長子は三郎右衛門と称して家にあり、上人幼名を竜寿丸と称し、五才頃（天文十五年頃）始め市内大場の光明寺に学び神童と呼ばれた。十四才の時、弘治元年四月廿五日（一五五五）同国の平方（越谷市平方）白竜山大善寺（林西寺の古称）八世笈井の弟子となる。翌弘治二年その学才を認められ江府芝の増上寺の観智国師の門に入る。（当時最高の学府）二十九才（元亀元年一五七〇）大善寺に帰り、同寺の中興を成し、第九寺の首座なり中興開山を成す。師弟を多く教化す。

天正十九年（一五九一）上人五十才の時林西寺（大善寺）寺領二十五石賜わり、円福寺にも寺領を賜わる。

文禄元年（一五九二）上人は一時近くの小字沖に一寺を建立し引移した様であり、平方沖前山月照院の項参照

考察するに林西寺の末を新編武蔵風土記稿にて思うに末寺の開山・中興開山の間が呑竜上人と師弟関係にあった如くに見受けられる。

平方　①　崇源寺（明星山）本尊阿弥陀・中興・

円誉宏波　元和二年三月寂（一六一六）

②　西来寺（聖徳山）開山、宏誉宏玉不詳。

中興開山、禮誉三奥　万治二年三月寂（一六五九）

③ 月照院（池前山）吾竜上人印提の寺

福岡

④ 称明寺（一行山）開山　一阿修得　中興

⑤ 勝林寺（稲荷山）中興開山　勝運社退誉

吾竜上人に隨学す。寛永七年寂（一六三〇）

⑥ 還到院　開山依誉　（一六五八）

⑦ 真福寺（西川山）開山栄誉　慶長十九年

十一月十三日寂　（一六一四）

大畑

⑧ 西光寺（大畑山楠阪院）

一の割

⑨ 円福寺（大河山聖蔵院）開山祖覚、吾竜に

学び、承応元年寂　（一六五二）

の如くである。

慶長十八年（一六一三）　徳川家康公祖先の霊地上野に義重山新田寺大光院を開基し、開山和尚に吾竜上人（七一才）招請される。この間久喜町に大畑（春日部）に於いて、関ヶ原、小田原攻めの後の為、農地は被弊しており、農民の子を集め扶育し、手習を教え子弟の感化に尽し、その行は慈父　釈迦仏の如く次第に近郷の農民にも感銘を与え、同化し良民と成す。

現に三十才代の近隣の成人の人達は吾竜ッ子と愛称され今に至っている。

病弱の子供達を四月八日　釈尊誕生の日に円福寺に集め、饗の川の組立図と釈迦禾ハン尊を本堂に販出して、絵図による教化は日本託児所の最古と目されている。

その諸版本や図像・饗の川の組立図が倉庫に ホコリに埋もれている。現今宗教、信仰等を別としても何等かの目的にて保護・保存出来ないものだろうか。

上人元和九年八月九日（一六二三）八十一才にて示寂す。

以下別稿の誌文を参考照合をそう

呑龍上人略伝

其の一

当時雨山、諱は呑龍、字は然誉源蓮社と号す。俗姓は源氏、源氏は井上武蔵国埼玉郡一の割村の人なり。其の父を井上将監信貞と云う。乃ち太田道灌の家臣なり。主家滅亡の後一の割村に隠かの米地あるに依り此処に帰農し、二君に仕えずして永く阿隠居の風を慕う。一日其妻「近男」龍神の社に詣ず。而して其夜一片の黒雲国門より入るを夢む。而してそれより自ら身の重さを覚ゆ。夫信夢之を悦べり。天文十一年壬寅の年八月廿五日、難なく男子を生む。是即ち上人なり。二～三才の頃より人の念仏するを見ては完爾として笑みを含み亦態自ら念仏し給う。天資聡明にして記憶群童に似ず、動静殆ど大人の如し、宿因の然らしむる所か。常に龍神の社に遊び小石を以って仏像に擬し土をもって供具として祭しみ給う。宛も宗祖大師の児童たりし時の形状を髣髴せしめたり。十三才の春忽然として出家の志を起し、切に在俗の形をきらい給えり。一夜瑞夢を感じ之を父母に語る父母之を聞きて大に歓喜し、即ち其の出家を許して隣村平方村大善寺麦米和尚の室に投ず。時に、十四才弘治元年乙卯の春なり（一五五五）即西一二年の前。後奈良天皇時代）此に於いて始めて仏家の業を受く。「聞一知十」の才、時の人舌を巻き歳を繰じ疑を出す。吾聴に恥じず、是歳八月待度して法名を呑竜と称す。該師のち以謂、此沙弥非凡の法相稀有の良材なり。模索を以てはだすべきに非らず早く衣師に伝通せしむるに如かずと。

十五才の夏より東京芝増上寺、観智国師の下に出錫せしむ。国師く其の俊才を美し教論他に異りこの門徒にて学業の進歩層を比ぶる者なし。

衆望横溢、年を重ねて倦まず、修行益々高く道心益々深し。自証の盛者を雲誉上人に化、世の秘蹟を雲誉上人に伝え給う。かつて衆照神君増上寺の論義の席に臨み玉い、上人の精義妙糸絶倫なるに驚き、其れを絶賞し玉う。而してそれ以来帰依殊に厚く、若干の禄を与え賜いて修学の費に充てしめ、祖先の追福の為に当山を造営し、寺号を林西寺と改めて上人をして開山たらしむ。

源流雲の如く集って業を受け、遠近風を望みて化を蒙る。後亦　神君の命に依り滝山大善寺に移り、新田大光院へ転ず。何れも開山と称せらる。

元和九年癸亥八月九日安然として示寂し玉う。

（元和九年は一六二三年、更に三百四十年前に当り

天文十一年一五四二年生誕以来満八十一歳示寂

寿八十二才、嗚呼上人在世の化益実に計り難し。

或る時は悪業を覆して鬼を哭せしめ、或る時は難

入を置して自ら苦に代り玉う。当時の人、上人を

以て生身の菩薩と為し、滅後人民の祈願を満足せ

しめ玉うこと愈々著し。之に依って信敬する者年

を経て益々多し。夫れ山高けれども見ること速く、

源深ければ流れ広し。上人行徳の高き慈恩の深き

仰いで称すべく伏して敬すべし。

これは版木に依り刷りあげられているので当時

相当数刷られ、信者若しくは当時、関係する人々

に配布されたものであろうと思われるが、この書

伝は他にないので、当時を知る貴重な小冊子である。

其の二

○ 市野割村 附持添新田

市野割村は江戸の里程　検地前村に同じ、村

内香取社の鳥口に一枚目と云り、同社の縁起に

は市野目と書せり。之は文字を誤え用ひしまで

のことなるべけれど、今の如く唱えとなりしは

何れの頃よりのことなりや詳ならず、又かの縁

起に太田十郎の家臣井上將監といへるもの当所

を領せしよし見ゆ。將監の子孫連綿としてみに

村民にのこれり。其系所みるべし。

民家八十五、東隣後村、西は谷原新田、南は

蒲谷村、北は猫壁宿なり、東西十町、南北五町

余、当所も前村と同く元御料所にて後、小笠原

佐渡神に賜い、宝暦三年御私に渡せり。外に大

岡十三郎が検せし持添の新田あり。

※小名　みゝやう。

ここにもとみゝやうとうといへる古き塔あり

し故　此名ありといへど詳ならず。

※堂宛

※ 高札場　東南の方にあり

○ 香取社　村の鎮守にて圓福寺あづかれり村内

にわづかの堤あり・当所にては其の名を唱へざれど、柏壁崎の辺にては江僧堤とよべり・此社古へ其堤上にありしを、前にいへる井上将監及び大熊弾正などいへるもの、力を合せ当所に引移せりと云、文永元年圓福寺の住僧祖岌が書きし縁起あり。其の書に当祖元新方郷の惣鎮守にて、本地十一面観音は行基の作なり・昔尊恵三年末太郎といへるもの、奇異の霊験を蒙り鰐口を寄進せり・又平方村林西寺中興春竜和尚立願せしに其験ありしことなど、こまごまと書つづれど、させる証とすべきこともあらざれば其要を摘てここに録す・鰐口の図上の如し。

○ 三島社　圓福寺持

○ 稲荷社　同　持

○ 圓福寺　浄土宗、平方村　林西寺末・本尊阿弥陀、開山祖岌は当郡の人にて瀧山大善寺第三世・春竜に剃法し、康応元年示寂せし由　浄土縛灯絵　系譜に見えた。

※伯家者弥平太　氏を井上と称し先祖を将監

（鰐口の社取香）

※上段長終行よりつづく。

と云、岩槻城主太田十郎氏房に仕へ、当所に於て永五拾貫文を賜ひ、氏房没落の後跡を民間にかくせり・男子二人あり・長男を三郎左衛門と云、次男某十四才にして剃髪し、平方村林西寺に住職して然善西龍と号し、後高徳の師をあり三郎左衛門が子も、又父の名を襲ひ夫より連綿として当所に居住し、今の弥平太に至る。前に出せる香取社鰐口の本願末太郎といへるは、これが先祖なるべし。といへど、其詳なることを知らず、

新編武蔵風土記稿　巻ノ二〇六

埼玉郡の編新方領より所收

の　井上家は現在円福寺の門前の井上俊雄氏が当主である。

宅地構成は、北東部は旧利根川の古道に面し、西南部は構え廻が寺域部まで含み（現本田）まれに中古豪族の堅壕地としての遺構が見られる

尚、井上将監信貞着用と伝えられる具足も近年まであり、筆者　昭和三十年頃拝見した。現在家作の立替え等により紛失した様である。

◎　前掲の鐘口は、戦後盗難にて現存しない。新方庄記録の金石銘としては最古のものであった。（享徳三年は一四五四年で五百十四年前のもの）

◎　円福寺は上人誕生寺として末印寺でもあるが、度々の火災の為、書状は失っている。

◎　小名　みしやうについて古墳にありと伝うも今はなく　馬鳴菩薩（AD100）養蚕の守護神であり中古において、養蚕その意欲改納えのため建立されたか　近くに青石出土す。

◎　平方村

平方村は江戸より行程八里、民家百八十五。南は船渡、大泊の二村にて西は大枝、大畑。備後の村々に接し、東北は古利根川を限り、川の向は葛飾郡鍋子口、赤沼、藤塚の三村なり、東西二十町、南北十町許、御入国以来御料所なり。用水及び検地の年代前村に異ならず

※　高札場　北の方にあり。

小名　横手　南　東　沖ノ新　砂田　戸崎、山谷

※　古利根川　東北を流る。川巾百間許、此川ろちに村民私に渡せる渡船場二ケ所あり、一は高柳藤塚村に通じ、一は同郡赤沼村に渡す。

※　春取社　村の鎮守　西光寺の持　下二社持同じ。　末社　稲荷、荒神、　○　稲荷社

◎　女躍社　○　春取社（西楽寺持（○　））

○　三島社（月照寺持下同じ）　○（昆富社）

○　洗面社（崇源寺持）　○　雄天社（村民持）

※　林西寺　浄土宗、京都智恩院末、白龍山月照院と号す。本尊阿弥陀、恵心の作、開山

特海成阿、示寂の年代を伝えず。開九由然善吞
龍を中興開山とす。傳遊総系譜に、源盛社然善
吞龍大阿故信と号す。武州岩槻の人、井上氏に
て初めて列の平方林西寺の笈弟に投て、前梁国
其寺に住し、増上寺観智国師に随学し、後滝山
太喜寺に移り、又上野国新田大光院に住し元和
九年八月九日八拾余才にて示寂と載せたり。当
寺伝の墓に吞竜は武内市野倉村井上将監と云え
る者の二男にて、後林に投じて剃髪し、初めは
蟹竜と号せしを後神君の上意を蒙り、吞竜と改
したりと云、又いつの頃にか　神君の御前法問
の時、吞竜拔群なれば、御感賞として学問の料
五十石を賜はれり。この時より藤田流を改め、
白旗流となり、則ち今の如く習学院の末となる
由。後天正十九年廿五石の御朱印を賜はれりと。
　猶吞竜のことは市野倉村の民　井上氏の系図
るべし。今も御朱印廿五石なれば、被学問料は
吞竜のみへ賜ひしなるべし。

○　鐘楼　近年鋳造の鐘なり。
○　二尊堂　地蔵観音を安す
○　東源寺　林西寺の末、下二ヶ寺も同じ末なり。

明星山と号す。本尊阿弥陀、中興開山四巻波
元和二年三月示寂。
○　西泉寺　聖徳山と号す。開山波巻示寂の年月
を失う。中興を巻巻三貞と称す。万治二年三月
示寂
○　月照院　沖前山と号す。当寺は本寺吞竜院建
の為、文禄元年建立せしと云う。因て院号本寺
と同じ
○　西光院　新義真言宗、尾ヶ崎村勝軍寺末。如
体山と号す。本尊阿弥陀。
○　西光寺　同宗、諸衛郡赤沼村浄泉寺末、瑞祥
山と号す。本尊薬師を安す

◎　備後村

　備後村は民家百四十餘、南は大畑村、北は瑞
穂村、西は市野倉村、東は古利根川を隔り、川
の向は諸衛郡鉄子口・藤塚の両村なり、東西十
二町、南北十九町日光街道村中を貫り、郷入国
以来御料所なりしを、元禄十一年村内を割て森
川錦三郎、高木善之助、戸田勘兵等が先祖に賜
はり、残る廣は即ち御代官所なり。検地江戸の

里数は前村に同じ

※ 高札場　二ヶ所　一は中程、一は須賀瀬にあり。

※ 小名　上組　中組　下組　須賀瀬

※ 古利根川　村の東の方を流る。川巾四十五間許。

香取社　村の鎮守、眞福寺持、末社、浅間、飛天、稲荷、秋葉三峯稲荷合社、◎ 稲荷社二宇、一は勝林寺持。一は村民の持。◎ 雷電社　是も鎮守とす。村民の持。末社天神。

◎ 称名寺　浄土宗、平方村林西寺末、一行山と号す。開山一阿修得。本尊阿弥陀。

◎ 勝林寺　本尊前に同じ。稲荷山と号す。中興開山退誉・寛永元年示寂す。得淫慈茶羅に勝運社退誉和尚吞竜に隨学し、後当寺を開くと記し、この外のことはのせず、本尊阿弥陀。

◎ 遠到院　是も同じ末。開山欣誉・万治元年示寂、本尊阿弥陀を安ず。山号を本国と云。

◎ 眞福寺　同末。西川山と号す。開山栄誉慶長十九年十一月十三日示寂、本尊阿弥陀。

○ 大日堂　村持

○ 漆飾堂　眞福寺の持

○ 観音坊　称名寺の持。

◎ 大畑村

大畑村は江戸より里数七里半、当村もと大場村に属せしといへど、分れし年代詳なる事を知らず、民戸五十二、南は恋岡村、北は備後村。東は大枝村、西は大場村にて東西五丁。南北十一町。御入国以来御料所なりしが、正徳五年村を割いて岩槻城主永井伊賀守に賜はり、其後里数六年上りて御料に復し、今は全く御代官所なり。検地年代前村に同じ。

高札場　村の中程に在り。

香取社　村の鎮守、村民の持。

雷電社　西光寺の持。

飛天社　村持

◎ 西光寺　浄土宗平方林林西寺末、大富山慶取院と稱す。本尊阿弥陀。

○　大日堂、村持ち下図と。
○　薬師堂

呑竜上人誕生地

四福寺縁起

呑竜上人の誕生地は市内一の割四福寺山門脇の現当主井上俊雄氏の家に父井上将監信貞（岩槻城主太田美濃守資正の家臣）の二男として天文十一年八月廿五日生まれた幼名を竜男丸という。

寺小屋（大場光明寺）に入門した時は神童とたたえられた。永禄十二年春十四才の時、浄土宗白竜山林西寺（越谷市平方）第八世岌井和尚の弟子となり、元亀元年四月　十五才の時、岌井和尚の推薦により増上寺の学寮に入り（当時の最高学府）観智国師の弟子となり修業し後、入治して然誉上人の称号を拝受しました。

後年、徳川家康の御前法前にてその秀抜を賞賛されて蓮阿料五十石を賜り、名を呑竜（前は竜竜）と改められました。慶長年間家康が祖先の新田義重の追善供養のため（群馬県太田市金山）に義重山新田寺大光院を開山し、上人は開山僧として招かれました。事跡については、呑竜ッ子等ですでに周知のとおりでありますので、割愛させていただきます。

備後村と勝林寺本尊について

武里小学校の裏にあり、一の割駅又は武里駅より十五分

原稿　写真　一葉

人皇第八十四代順徳天皇の建暦元年（一二一一）に春日部沼部少輔の建てられたもので、この稲荷の本地は、十一面観音であります。

当時は関東地方のなかばは海であり城主治部少輔の館は八木崎という岬の八幡山にあり、この須賀原は海中の小島でありました。ところがこの島から不思議な光がこうこうとさし、海中を照らすことが一年にも及び、魚類は逃げてしまい漁夫は漁が出来ず困り、城主に申し出たので城主はあちらこちらと調査したところ、一本の枯れ木の朽ちたところに観音の像がありましたのでふしぎに思

って城中に持ち帰り、城中にまって拝んでおりました。ある時、どこの国の人ともわからない一人の僧がお城に来て施しを求めました。門番は、その僧が普通の者でないのをさとり、城主に告げ、城主はさっそく僧を招いて尊像を拝みせました。

すると僧はおどろいて「この本尊は何処から持ってまいったのですか」と尋ねました。

城主は「あの須賀島から現われたものであります」と答え

僧は「ふしぎなこともあるものかな」と言って感しんで三たび礼拝したので、城主はあやしんでそのわけを尋ねますと「この本尊は唐の国から渡って来たものでありましょう。」といって次の様な話をいたしました。

「これは昔弘法大師が唐の国へ渡り、文殊菩薩の教を受けた時・法門契約のしるしとして菩薩から授けられたもので、契約本尊と申しとげ、大師はその像をいただき、帰朝後備後の国へ安置しておきました。その後長い年月を経て備後の国は兵乱がしきりにおこり国中がおだやかでないので、難をさけて東国へ移るものが多くありこの像を安置しておりました者の人たちも像を奉じて船にのり、東国へ下りました。途中海が荒れて難破する船が数多くあった中にこの像を安置した船は全く無事で一人の事故もなく岸に着きました。みんなふしぎに思い「これは全く尊像のご利益だ」と尊像を拝り奉ろうとすると、たちまち何処へともなく飛び去ってしまい、所在がわからなくなってしまった。これはたしてその尊像にちがいありません。

今後縁が熟してここに拝むことが出来ました。

と言って僧は涙を流して拝んで行きました。

その後ある夜、城主の夢枕に八十才位の老人があらわれ「われは、稲荷大明神である。あの島に社を建てよ。われは国家の守護となろう」と言いました。

城主はおそれかしこみ、この社を建てたと伝えられ、本尊は備後の国からおいでになったので、村名を備後村と付けたと言われます。

以上の文は元文六年（一七四一）勝林寺廿三世浄与という人が古文書から口述されたものです。なお

本尊は現在も勝林寺に安置されております。

㊟1 縁起書に記さる治承以前なる人物は、
重右の春日部氏の研究にては、春日部兵衛尉
実高か、又は右衛門尉実光の古代にあたる

㊟2. 同じく春日部甲斐守実景 寛元元年（一二
四三）市内成山に稲荷社を勧請している。実
景は実光の子である。主産物政績の神たる稲
荷社を勧請祭祀し、民心の安定と 御農策に
盡力したる様子がうかがえる。

㊟3. 境内に大樹あり、その古木にヤドリ木あり、
学名ビスクム・アルブン・H・ボールテスクルス・
MAXIMO・と呼稱す。植物学者牧野博士の
遺名であり、西欧にてはクリスマスの祝に飾
る。

㊟4 近隣に薄後に十三佛板碑三基、大場に一基
が存する。

㊟5. 至近に新方領耕地整理事業の功労者、 景
又右衛門の墓所に頌徳碑がある。新方領耕地
整理は、当時有史以来最大の耕地整理であり
幾多の苦難と困難が有り、今日、六十年を経
てすでに忘れ去られようとしていることは誠
に心痛の限りなり。

昭和四十三年四月 日
第十七回 史跡めぐり資料
越谷市郷土研究会々員
山岩 井 茂